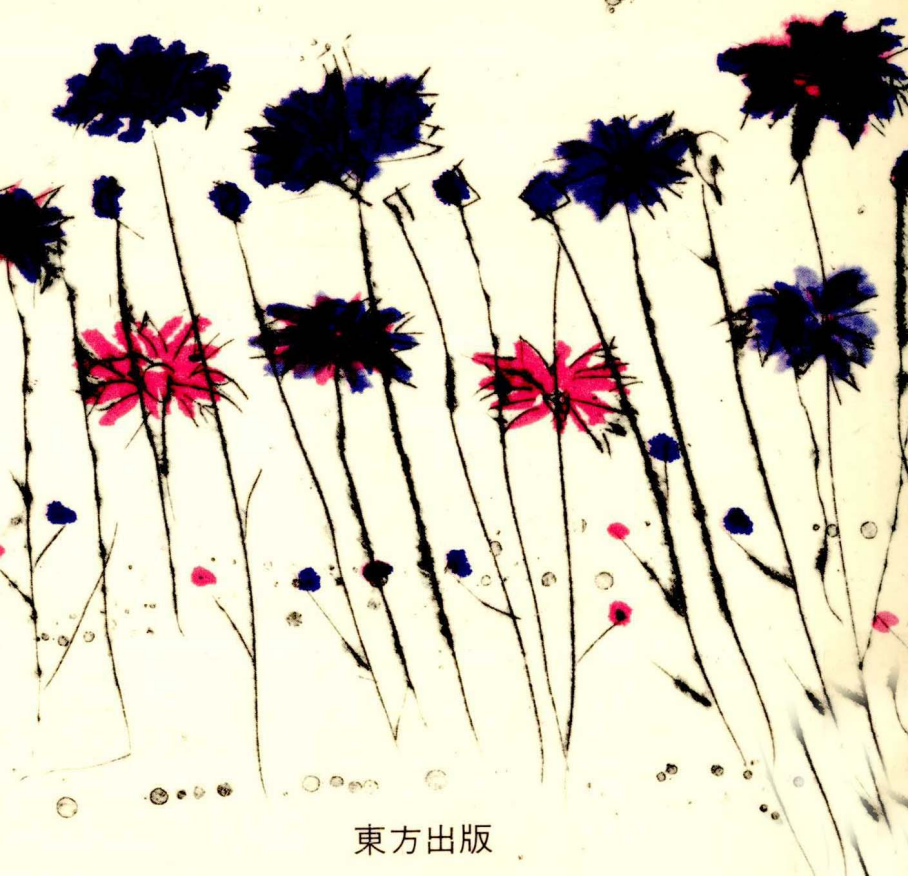


矢車草ひとみに揺れて

空襲を語り継ぐ

金野紀世子



東方出版

矢車草ひとみに揺れて

空襲を語り継ぐ

金野紀世子



東方出版

金野 紀世子（こんの きよこ）

大正11年12月、広島市に生まれる。大阪私立浪花高等女学校卒業。大阪税関、大阪陸軍兵器補給廠、帝国精機工業に勤務。昭和20年6月1日、第二次大阪大空襲に遭遇する。昭和21年岩手へ嫁ぐ。昭和36年帰阪後、淀川区で食堂を経営し、現在に至る。

現在、昭和46年5月に発足した「大阪大空襲の体験を語る会」の代表。大阪府平和祈念戦争資料室運営懇談委員。

現住所 大阪府豊中市服部寿町2-14-18

矢車草ひとみに揺れて ―空襲を語り継ぐ―

1987年8月15日

初版第1刷発行

定価1,200円

著 者 © 金 野 紀世子

発 行 者 今 東 成 人

発 行 所 東 方 出 版 (株)

〒530 大阪市北区西天満3-2-4

☎06-365-5421 振替大阪4-20522

印 刷 所 東 洋 印 刷 製 本 (株)

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

0095-000901-5380

りつつ」 89 / 戦友 96 / 女どうし 98 / 父の病氣、そ
して死 100

第三章 出 会 い・大阪大空襲の体験を語る会

105

- 食堂開始 107 / 再 会 110 / 扇子の思い出 112 / 「大阪
大空襲の体験を語る会」の始まり 116 / 一通の封
書 120 / 崇禪寺様との出会い 122 / 小母ちゃんパワ
ー 124 / 同 志 127 / 素晴らしい人達 128 / 強力なパー
トナーを得て 131 / 六冊の『大阪大空襲体験記』 134 / 動
員学徒の遺族達 141 / 体験画を描く 143 / 思わぬ対
面 147 / 天国に逝った子供 150 / 長柄橋の供養 154 / 旧
国鉄京橋駅長の証言 157 / 戦争資料室開設の嘆願
書 160 / 写経との出会い 162 / 無償の支援 165 / あの日
のネギ 168 / 画集の刊行と全国連絡会議大阪大会の実
現 170 / 最前線の戦争体験を聞く会 174 / 二人の男
性 178 / 戦時防火用水池の調査 182 / 防空壕のその

後 184 / 私がもらった慰問文 187 / 浪速神社で出会った
二少女 190 / 恩人の死 194

第四章 作品抄 197

ひろしま 199 / 動員学徒達と共に 205 / タラワ島守備隊
員の遺族 221

あとがき

装 幀
粟 津 謙 太 郎

第一章 娘時代・私の戦争体験

大阪港第二突堤の惨状を思う

私にはいつも心から離れない、そしてまぶたの奥から浮かび上がってくるいくつかの光景がある。それは決して美しく楽しいものではなく、悲しくつらい、もう二度と振り返りたくない光景である。けれど六十四歳の現在でも、私はその光景の中に立っていて、悲しい、恐ろしいものを見た場所から精神的に離れることができない。

その場所とは……、大阪港付近の光景であり、「戦争」を目のあたりにした所である。

私は昭和四年、七歳の時から大阪港第二突堤の近くに住んでいた。

当時、埠頭付近では浚渫^{しゅんせつ}工事が行われている最中で、広々とした草原の横を貨物の輸送のための臨港鉄道が、湊町から浪速駅を経由して大阪港まで続いており、埠頭には数多くの倉庫の建物が整然と建ち並び、白く幅広い海岸道路の両側に続くアカシア並木の風景は、西欧のどこかの港町かと錯覚させられるような所だった。黒々と長く続く巨大な鉄管からは、終日土砂を滝のように吐き出しており、泥土の埋め立て地は二、三年の間にいつの間にか広々とした草原に変わり、ピンク色の浜屋顔が一杯咲き乱れていた。そして臨港線の枕木の側^{そば}には、鮮やかな水色のつゆ草が赤茶けた砂利に埋もれるように咲いていた。

私はこの潮風の吹く埠頭の側で、二十二歳までの十五年間を暮らした。そして、人間として心

に残る恐怖と筆舌に尽くせぬ悲しいドラマを目撃したのである。

第二突堤付近のたたずまいは、五十余年の年月の経過によってすっかり変わっているけれど、残っている倉庫の建物や工場もある。

耳をすますと、ドラの音が高く高く聞こえて来る。岸壁に巨大な真つ黒い軍用船が何隻も横付けされていて、その軍用船の甲板はカーキ色の軍服を着た兵士達で埋まっていた。

私は一年のうち何回か、ふるさとに帰るような懐かしさで大阪港を訪れる。市バスに乗って第二突堤前で降りる。空は青く、街路樹の緑が美しい。海岸道路を横切り、岸壁まで歩いてゆく。そして潮の香の中にたたずみ、風の音を聞きながら、落日の茜色あかねに染まる海を見ていると、遠い日私が見たこの世のものとも思えぬ光景が次から次へ一度によみがえってきて、救いを求めるように、今歩いてきた海岸道路の方を振り返り、ずっと遠くまで続いている倉庫や工場の建物を見る。

今も残っている古い工場の外から、そつと中をのぞいて見る。当時と変わらない薄暗い工場の中は、油の臭いがしている。この工場に十四、五歳の少女たちが四十数名働いていたのだ。旋盤のうなりが聞こえて来るようだ。もう一度工場の中に目をこらすが、昔の幼い少女たちの姿はあ
るべくもない。

そつと工場の側を離れる。天保山運河の側に立つ。この真つ黒い川で、たくさんの友が亡くなったのだ。あの水面から両手をぶら下げて、友が引き揚げられて来た。

昭和二十年六月一日の悲劇を思う。

旧制高女時代

私は大正十一年十二月十一日、広島市尾長町の母の実家、岩香知太郎方で生まれた。昭和二年、父の勤務先、神戸高等商船学校に近い兵庫県深江の森という所に移り住み、さらに四年春、大阪市港区七条通りに移る。父が大阪市港湾部に就職したためである。大阪市立築港南尋常高等小学校に入学。五年、港区出崎町三丁目の大阪市港湾部公舎に転宅する。

毎日、子供の足で約二十分はかかる距離を歩いて小学校へ通った。小学校への道は倉庫ばかりで、人家は全くなかった。高野堀にかかる難波津橋を渡り、晴天の日にはくっきりと空に浮かんでいる雲を見て、いろいろな花や人形に見えると言っては友と一緒に楽しい想像をしながら通学した。

六年に満州事変が勃発し、大阪港では主として住友岸壁から満州派遣軍が出征した。小学校四年生の私が、小さな弟を連れて兵隊さんを見送りに行った時、一人の兵士が弟をじつと見て頭をなでてくれた。「きつとあの兵隊さんにも弟くらいの子供がいたのだろう」と、子供心に思ったことを覚えている。

翌年、上海事変が起こる。学校では「非常時来たれり我等が上に、非常時、非常時、前代未聞の……」という歌を、毎日歌わされた。子供心に「非常時何やろ」と思った。

また「肉弾三勇士の歌」「討匪行の歌」を教えられ、私は「討匪行の歌」のメロディーが好きで毎日のように歌っていた。

十年四月、大阪私立浪花高等学校に入学した。当時の浪花高女の周辺は広々とした田園地帯で、校舎の前には生徒達のために学校農園が設けられており、各学年、各学級ごとに花や野菜を作る事が出来た。懐かしい女学校生活の思い出の一つである。しかし、築港の自宅から学校まで一時間以上かかるのは、ちよつとしんどい感じだった。

三年生になった年の春、新任の体操の教師が着任された。野呂正文という先生で、当時二十三歳の先生は、東京の体育専門学校を卒業したばかりの大変ハンサムな素晴らしい方であった。きびきびと生徒達を指導し、生徒達も体操の時間を楽しみにしていた。

先生は、黒いブルマーに真っ白い体操服姿の生徒達をよく学校の外へ連れ出した。生徒達は、学校の外の田園地帯をかけ足で走ることが嬉しかった。遠く生駒連山を仰ぎ見ながら、先生と共に走る時、一番背が高い私は先生のすぐ後をかけ足でついて行きながらおしゃべりするのが楽しかった。

走っている途中で、中年の小父^{おじ}さんが畑の小道をうす汚れた白い布袋をかついで、何か手に持って歩いて来るのによく出会った。そしてその小父さんは時々、手に持っている細い棒のような

もので草むらの中から何かを引っかけて、ポイツとその袋に入れていた。

それは蛇であった。少女だった私には、丈なす草むらの中から実に上手に蛇を捕えていた男の人の姿だけが、妙に記憶に残っている。

現在の浪花高女の周辺は密集した町並となり、一望の田園地帯の風景などは想像することも出来ない程の変わりようである。年月の経過をまざまざと感じないではおられない。

十二年七月七日、日華事変勃発。野呂先生は、その年の八月に三重県津市の歩兵第三十三連隊の一兵士として出征された。そして間もなく華北の滄州そうしゅうという地で敵弾を頭に受け、壮烈な戦死を遂げられた。

悲報は全校生徒を悲しみのどん底に突き落とした。戦争がどんなに恐ろしく悲しいものかを想像することすら出来なかった私達にとつて、初めて知ったつらく悲しい体験だった。

学校側では、全校生徒の中から各級ごとに生徒の作文を収録して、先生の追悼文集を刊行することとなった。私の作文も掲載され、一生懸命心をこめて書いたつたない文章を今でもはつきりと覚えている。「師と敬い兄ともお慕いしていた野呂先生の御戦死の報を聞き……」と、こんな書き出しだった。

私は何を考えていたのか、おさげ髪だった髪の毛をある日パッサリと断髪にして登校した。私立校だったので公立校のように髪のコリはなかった。耳の下二センチ位に切った頭で校庭を歩いていると、野呂先生が向こうから歩いて来られた。

「今上^{いまじやう}（旧姓）!!」と私を呼び、「はい」と答えるとちよつときびしい顔付きで「髪を切ったのかい」と言われた。私はいたずらが見つかつた子供のように、ちよつと首をすくめるような気持ちで「はい」と答えると、「そうか」と言つたきり、黙つて向こうへ歩いて行かれた。

そんなことも今は大切な思い出として胸に残っているが、私立校とはいえ、当時の奥校長先生の方針により、学校には素晴らしい先生がたくさんおられた。

音楽の杉江先生は「明治節」の作曲をした方で、生徒には大変きびしい先生であつた。英語の金森先生、国語の柳井先生をはじめ、数学の柴垣先生らがおられ、柴垣先生はよく三高の寮歌を歌つて下さつた。自習の時間、戦記文学ばかり読んでいると、「もつと他のものも読むように」と言われたことを覚えてゐる。

歴史の七尾先生は激戦地フィリピンから生還され、東大阪のお寺の御住職として健在なのは本当に嬉しいことである。

また、親友の豊田美代子さんは文学少女で、在学中からよく難しい本を読んでいた。五年生の頃すでに『若きウェルテルの悩み』をはじめ純文学をたくさん読み、『麦と兵隊』のような戦記文学ばかり読んでゐる私とは雲泥の差の読書経験を持つ友だつた。彼女から教えられることは多かつた。

八千草薫によく似た美しい彼女とは、学校の帰り道、近鉄今里の駅までの野原で四ツ葉のクローバーを探したものだった。夢中で探しているうちに一時間位はすぐに経つてしまい、慌てて駅

へ急いだことも何度かあった。

現在、彼女は鎌倉に住み、年に何回か来阪する。親友としてのつき合いが、今も続いている。

大阪市港灣部公舎の生活

昭和四年から、私は港区出崎町三丁目にある大阪市港灣部の公舎に住んでいた。公舎は約四十戸程で他に民家は全くなく、付近は工場と大きな倉庫群がアスファルトの海岸道路に沿って建っていて、淋しい静かな町はずれのたたずまいを見せていた。

四十戸の公舎には子供達が多く一戸建ての家が多かったので、大きい子供達は滅多に外で遊ぶということはなかった。けれど小学生やもつと幼い子供達は、夕方遅くまで外で石けりやままごなどをして、夕食時に母親に呼ばれるまで遊びに没頭していた。子供の足で二十分以上はかかる所に小学校があつたので、子供達はそれぞれ気の合った友達と三々五々、時には潮風に吹かれながら、抜けるように青く澄み渡った空の下を学校に通つたものだった。

海岸道路は当時としては珍しいアスファルトの大きな道路で、三条通りの電停から第三突堤まで一直線に続いていた。

小学校からそれぞれ旧制中学校や旧制女学校へ通うようになって、幼い頃からの友達は名字みょうじ

を呼ばないで、「つやちゃん」「くうちゃん」「帝子ちゃん」などと呼び合い、私のことも皆が「きよちゃん」と呼んでくれていた。私の一番の仲良しは、一つ年下の森山帝子さんといった。どこへ行くのも一緒に、お互いの家へ行ったり来たりして、よく第三突堤の端まで走って行つて遊んだものだ。

私が旧制高女の三年生、彼女が一年生になった時、日華事変が勃発し静寂そのものだった大阪港一帯は大出征軍の出発基地となり、馬方さんが荷馬車を引いてことごとと通っていた海岸道路一帯は、軍用トラックの列や陸軍部隊の通過、大砲、軍馬、車輛の搭載作業が連日目撃されるようになった。各突堤の入口には歩兵第八連隊と第三十七連隊の兵士が交代で歩哨ほしやうに立つようになり、突堤付近で遊ぶのは難しくなってしまったが、港灣部公舎の住民だけは大目に見られていた。私と帝子さんは、純白の船体に赤十字のマークを鮮やかに描いた病院船が入港すると、岸壁の側まで走って行き、たくさんの看護婦さん達と仲良しになった。出港の時は二人で「婦人従軍歌」を歌って看護婦さん達を見送り、甲板上の看護婦さん達も手を振ってくれて、一緒になって「ほづつのひびき遠ざかる あとは虫も声立てず——」と合唱した。

次第に遠ざかる病院船を見送りながら、帝子さんが泣き、私が泣き、夕暮れの岸壁に立っていた思い出は忘れられない。

昭和十八年、彼女は長崎へ嫁いで行った。私が大阪陸軍兵器補給廠の筆生として勤務していた頃だった。その後次々と、つやちゃんもくうちゃんも学校の先生になったり結婚して行った。二

十年六月一日の第二次大阪空襲により大阪港一帯は廃墟と化し、港湾部公舎の大半は焼失した。幼友達は散り散りになってしまい、公舎の跡も空き地となり、戦後長い間放置されていた。

昭和二十一年九月、私は岩手へ嫁ぎ、懐かしい幼友達を探すすべは全くなかった。

日華事変勃発の頃

昭和十二年七月七日、北京郊外蘆溝橋に於いて日華事変勃発後、二、三日経った頃から、大阪市港区三条通り五丁目から大阪港第三突堤に至る海岸道路付近は、日本各地から集結する陸軍の大部隊で埋まるようになった。

まだその頃は旧制の軍服で、襟章の色で兵科が判別出来、歩兵あり、工兵ありで、輜重兵^{しちじゆう}、野砲兵の各部隊の現役兵達が、連日のように第一、第二、第三、住友、桜島の各埠頭から何百隻とも知れぬ軍用船で出帆して行った。特に野砲及び弾薬車の列は海岸道路に五百メートル以上連なり、実に壮観ともいふべき光景だった。

事変勃発当初の頃は家族の見送りも許されていたため、海岸道路では老人や子供を背負った若い女性が続々と炎天下、汗を流しながら埠頭へ急ぐ姿が見受けられた。特に軍用船の出港前、日^ひ和橋^{わはし}という橋の上に立つと、何隻もの軍用船に軍馬や大砲を搭載する光景が望見出来た。中でも

軍馬が吊り上げられ、足をばたつかせて虚空を蹴って、一頭また一頭と積まれていった光景は忘れられない。

京都師団の片桐部隊が出港した時、私は弟妹と共に、岸壁の溢れんばかりの見送り人の中にいた。知った人がいたわけではないけれど、近くに住んでいたから見送りに行ったのだった。私の横に色の浅黒い、しかし顔立ちの整った二十二、三歳の若い女の人が赤ちゃんを背負い、一生懸命甲板を埋めつくした兵士達の方を必死で見上げていた。

私が「どなたが出征されるのですか」と尋ねると、その女の人は「主人です。私は朝早く京都からハイヤーでやって来ました」と言って、なおも必死な面持ちでカーキ色一色の甲板上の兵士達の方を、伸び上がるようにして見上げていた。

背中の赤ちゃんの顔はもう記憶にはないけれど、農家のお嫁さんだと話していたあの女の人の大切な主人を見送る必死の面持ちだけは、今もはっきり私の目に残っているのだ。

片桐部隊は南京攻略戦に参加し、多数の戦死者を出したと聞く。彼女の御主人は生還出来たのだろうか、今でもふと思ったりする。

昭和十三年秋、弘前第八師団、宇都宮第十四師団が第三突堤より出征。この頃、当時陸軍軍曹で後に主人となった金野健吾（第八師団弘前野砲第八連隊所属）、横倉正三伍長（第十四師団野砲第十四連隊所属）、越塚保尾上等兵（第十四師団高崎歩兵連隊所属）らと慰問文により知り合った。三名共、現役兵として、また北支派遣軍の軍人として、大阪港第三突堤から出帆した出征部隊に属し